Title	2019年度三田史学会大会総合部会シンポジウム報告：人間の心性・身体性の歴史を考える：古代・中世を中心として：コメント1
Sub Title	Symposium at the 2019 annual meeting : considering the history of human mentalities and body : focus on the ancient and medieval times : comment 1
Author	桐本, 東太(Kirimoto, Tōta)
Publisher	三田史学会
Publication year	2020
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.89, No.1/2 (2020. 10) ,p.131(131)- 135(135)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20201000-0131

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

コメント1

本コメントでは大喜・三宅両先生の発表を受けて、心性・身体性の歴史といった分野の中国史における適応の可能性について述べる。私の専門は中国古代史なので、まずその時代から口火を切りたい。

ここに佐藤信弥『中国古代史研究の最前線』（二〇一八年）という本がある。書名の示す通り、中国古代史研究の最新の成果をまとめたものだが、これを一読してただちに感得されることは、中国古代史研究の最前線は歴史研究の最前線とは一致しないという事実である。心性史・身体性の歴史といった領域が歴史研究の最前線であるとした場合、この著書にはそうしたテーマの研究が紹介されていない。また日本史研究において心性史・身体性の歴史といった研究を生み出してくる原動力となった

のは、ここ四十年來営々として積み重ねられてきた社会史研究の蓄積であるが、佐藤氏の筆は社会史についても言及するところがない（ただしこのことは中国古代史研究において社会史的なアプローチをとった論考が存在しないことを必ずしも意味しない。高村武幸氏による『漢代の地方官吏と地域社会』などは社会史的な色彩を濃厚に漂わせた秀作である）。

これと関連して想起されるのは、谷川道雄氏が網野善彦氏との対談で述べた、次のような発言である（『交感する中世』一九八八年）。

中国の方は歴史自体がハードで、またその研究も面白くないし（中略）いろいろな意味でハードなんですね。

こうした言葉を発したのがただの平凡な研究者にすぎないのであれば、その内容についてさほど気に留める必要はないかもしれない。しかし谷川氏は六朝から隋唐の歴史について、巨大な仕事を残された大先達である。それほどどの巨人がこのような発言を残していることについては、やはり簡単に見過ごすわけにはいかないだろう。

谷川氏をしてかかる言葉を発せしめた原因はいくつか考えられるが、やはりその筆頭に位置すると思われるのは、この時代を研究する際に用いられる史料の質という根本的な問題である。つまり先秦時代から漢代、そして六朝時代に至る史料には例えば社会史という分野と親和性を示す書物の数が少ないのではないか。こうした推定は先に挙げた高村氏の研究を一瞥するだけでも容易に納得される。高村氏は斯界では知る人ぞ知る、出土文字資料を駆使して疾走する研究者である。つまり伝世の史料だけではなく、これに地下にうずもれていた木簡・竹簡といった資料群を研究の対象に加えてやることによって、社会史という側面に光を当ててやることができる、という事情が中国の古い時代の研究には伏在しているように思われるのである。中国古代における社会史研究の嚆矢とみられる工藤元男『古いと中国古代の社

会』(二〇一一年)が、分析の対象に伝世文献のみならず、出土文字資料である『日書』を重要な相方として加えていることは、決して偶然ではないと言えよう。

こうした状況は何も文字資料だけに見られるわけではない。例えば中国史の舞台にあつては、日本の絵巻物のような、文字通り上は貴族から下は非人に至るまで、それぞれの生息を丹念に描きこんだ絵画がほとんど見られないのである。もちろん中国絵画史に風俗画という水脈が全くないわけではなかったが、それはついに黄河のような大河を形成するには至らなかった。むしろ庶民生活を詳細に描き出すことに主力を注いだ作品は、一八世紀を待つてようやく登場する。外銷画がそれである。外銷画とは一八世紀から一九世紀にかけて、貿易のために広州に赴いてきた欧米人が土産物として持ち帰ることができるよう、彼らの目には珍奇なものに映った中国の風物を絵画として写し取ったものである。そこには当然、庶民生活の諸相も描かれている。つまりやや極端に言えば中国人は、外国人の視線を借りてはじめて「庶民」を発見したのである。

このような状況であるから、文献資料においても人々の生活に広く取材した作品は、その本格的なものとして

は南宋の洪邁（一一二二～一二〇二）の『夷堅志』まで待たなければならぬ。『夷堅志』は総数約二二〇〇の伝聞故事を擁する巨大な説話集であり、それは我が国の『今昔物語集』にも匹敵する。このことを象徴的に語っているのが南方熊楠である。晩年の熊楠が、わざわざ中国から『夷堅志』を取り寄せて日夜読みふけたことは有名なエピソードだが、その彼は死の二週間前、娘の文枝に形見として『今昔物語集』を贈っている。両者は彼にとって、非常に愛着の強い書物だったのである。こうした事実は『夷堅志』と『今昔物語集』の近似性を暗示してあますところがない。

しかし残念ながら、かつての中国史学界はこの書物に対してきわめて冷淡であった。つまり以前の宋代史研究は、『夷堅志』の世界を捨象した構築物だったのである。ただこうした状況は近年急速に改善されつつある。二〇一五年には伊原弘・静永健両氏の編集にかかる『南宋の隠れたベストセラー『夷堅志』の世界』という一般書が出版されるまでに、この書物は研究者の間でなじみの深いものになっている。

それでは『夷堅志』に類似する書物が宋代まで存在しなかったかという点、そうとばかりは言い切れない。例

えば『太平広記』は『夷堅志』と同じ宋代の成立だが、それは前時代の書物に広く類例を求めたアンソロジーであり、そこには唐代に語り伝えられていた物語も収録されている。このような事情を勘案すると、心性史・身体性の歴史といった領域に豊かな可能性が開けてくるのは、唐・宋以降ではないかという見通しを、一つの仮説として立てることはできるように思われる。

ただし先秦から漢代に至る歴史の研究においても、目の付け所によっては心性史の研究が全く不可能なわけではない。それを事実として示したのが矢島明希子氏の「中国古代の夜について——人間の活動と鬼神の出現」（『東洋史研究』七八巻二号所載、二〇一九年）である。この論文は、三宅和朗氏の「古代の人々と不思議——感性を手がかりに」（『古代の人々の心性と環境——異界・境界・現世』所載、二〇一六年）を踏まえたものであり、三宅氏はこの論文の中で、日本の古代人が昼と夜という時間帯に対して抱いていた観念を、以下のように説明している。

I 昼間は人間の活動する時間帯で、人間の感性では視覚が優位である。

II 夜は神・仏・鬼・妖怪などの異類が活動し、人間

の視覚がおよばないぶん、聴覚・嗅覚・触覚が有効に働く。

Ⅲ夕方には異類の活動が始まる。

Ⅳ明るくなる朝は、異類が退散し、人々が前夜の異類の不思議な活動の形跡を見つけて驚く。

矢鳥論文は要するに、この中でⅠとⅢは検証できないが、ⅡとⅣについては中国古史にも適応が可能なることを述べたもので、日本史研究の影響を強く受けながら、中国古史史においても心性史の研究が可能であることを示した好例であるといえる。

それでは同じ夜との関連から、中国古代における結婚式の挙行された時間について、次に簡単に触れておきたい。

婚姻者、何謂也。昏時行礼、故謂之婚也。

(婚姻とはどういう意味か。黄昏れ時に結婚式を行うがゆえに、これを婚と言うのである。)

〔白虎通〕嫁娶

あるいは

期、初昏、陳三鼎于寝門外東方、北面、北上。

(結婚式の時期は、空が黄昏れ始めた時であり、三つの鼎を寝門の外の東側に置き、それらは北側を向

け、北から順番にする。)

〔儀礼〕士昏礼

といった史料が示しているように、戦国時代から漢代にあつて結婚式が黄昏れ時に執り行われたことは広く知られている。それではなぜ中国古代の人々は結婚式を夜がまさに訪れようとする時間帯をわざわざ選んで挙行したのであるのか。かつて樺山紘一氏は「日本に黄昏時たそがれときという言葉がありますね。夜でも昼でもない夕方。朝でもそうですけれども、なにか曖昧な時間というのがごくわづかあつて、これに対する恐怖というのがあるんだということ、民俗学の方がたはおっしゃる。神隠しもその時間ですね。」と発言されている(『中世の風景』下、一九八一年)。決して間違つた見解ではないが、中国古代の婚姻の時間は、この視点からは解けない。結論を言うと、私は南方熊楠が「往古通用日の初め」(『全集』巻四、一九七二年、初出一九三〇年)の中で、中国古代では「日没を一日の初めとする習いありと判つた」としていることと関連させて理解すべきではないかと考えている。つまり結婚という人生の始まりに位置する儀礼を、一日の開始の時刻に合わせて行つたのだと考えるのである。これは飽くまで一つの脆弱な仮説にすぎず、しかもこれを

補強する材料は、長年気を付けてみているが、なかなか集まらない。やはり中国古代史における心性史の追及はむつかしいのだろうか。それにしても中国古代の夜には何かある。矢島氏が挙げなかった史料をしてみよう。

『詩経』小雅・湛露に「厭厭たる夜飲は、酔わずんば帰ること無かれ」とあるように、夜つびて酒をくみ交すことは中国の古代にもあった。ところがその一方で、斉の桓公、酒宴が楽しくてたまらず、火を灯して夜もやろうと言くと、主宰者の敬仲は、「臣、其の晝を卜して、いまだ夜を卜さず」と言いはなち、これを拒絶している（『左伝』莊公二二年）。同じく『左伝』襄公三〇年には伯有という人物の不徳をあげつらった中に「夜飲酒」という表現が見える。夜の宴会を歌いあげた史料と忌避する史料の併存。夜の中国古代史については今後更なる探求が望まれよう。

いよいよ紙数も尽きてきた。最後に大喜氏が挙げられた切腹の話題にことよせて、中国古代の肉袒の習俗を紹介し、本コメントの幕を閉じたい。肉袒とは衣服を肩肌脱ぐことであり、相手に加担する意思表示や謝罪の時、あるいは葬礼において中国古代人が見せたしぐさである。これについて高木智見氏は「古代中国における肩脱ぎの

習俗について」（『東方学』七七輯所載、一九八九年）の中で全面的な検討を加え、このしぐさが「現実の秩序や權威とは無縁の一個の赤身の人間としての地平に身を置く」ということであると解釈された。この見解は大喜氏の切腹解釈にも通底しよう。なお高木氏のあと、ひとり肉袒にとどまらず、中国古代のしぐさに関する研究は長らく発表されていない。これも中国古代史研究の課題の一つであることを最後に指摘し、擱筆したいと思う。